

探究的な学習におけるフィールドワークの効果 — SGH 学校設定科目「グローバル地理」の取り組みから —

地理歴史科（地理） 沼 畑 早 苗

1. はじめに

本稿は、2014年度に文部科学省スーパーグローバルハイスクール（以下SGH）に指定されたお茶の水女子大学附属高等学校において、SGH 学校設定科目として設置された1年生必修「グローバル地理」（地理歴史科関連科目）におけるフィールドワーク⁽¹⁾の取り組みが探究的な学習を行なう上でどのような効果があるか、実践をもとに考察することを目的とする。

大学における地理教育や地理学の研究においては、フィールドワークが重視され、必須のものとして扱われてきた。高校地理においても、少なくとも学習指導要領では一貫して重視され続けてきたが、池・福元（2013）¹⁾や篠原（2000）²⁾の実態調査が示すように、活発に実施されているわけではないのが実態である。⁽²⁾そのため、国際地理オリンピックの成績を諸外国の高校生と比べても、井田（2014）³⁾が指摘するように、「日本の生徒の特徴は、選択式のマルチメディア試験では比較的良好な成績を残すが、フィールドワーク試験では高い得点がとれない」といった特徴があり、国際的にも重要視されているフィールドワークが、中学の社会科地理学習、高校での地理歴史科地理学習においてあまり実施されていないことが課題とされてきた。

本校においては、SGH 指定の翌年である2015年度に学校設定科目として必修「グローバル地理」が開講されたことに伴い、高校1年の5月に従来から実施していた親睦目的の学年合宿の位置づけを、「グローバル地理」のフィールドワークと目的を変更し、地域調査を通じた課題探究を実践することで、探究的な学習のスタートとしてきた。本稿では、「グローバル地理」の概要について報告した上で、フィールドワークが探究的な学習を進めるにあたり、生徒にどのような影響を及ぼしたか、その効果を明らかにするとともに、今後の「地理総合」、「地理探究」に向けた素材の一つとして提示したい。

2. 本校 SGH 構想における「グローバル地理」の位置づけ

本校 SGH 構想では、「女性の力をもっと世界に一目指せ未来のグローバル・リーダー」の理念の下、グローバル女性人材として、自国の文化を含む多文化理解、共感力、協働精神を有し、国際社会の平和と持続可能な発展に寄与する意欲と能力を持つ人材の育成と、自律的に学び、考え、行動し続ける姿勢、チャレンジ精神の育成を目的として、教育課程の研究開発を行なっている。

方法としては、確かな基礎学力と広い教養を身につけながら、グローバルな社会の

諸課題に高い関心を持つ生徒を育成するための課題解決型学習カリキュラムを組んでおり、文理を問わない幅広い必修科目の履修を中心とした「教養教育」とお茶の水女子大学の全学的な支援・連携に支えられながら、1年生必修「グローバル地理」、2年生必修総合的な学習の時間「持続可能な社会の探究Ⅰ」、3年生必修総合的な学習の時間「持続可能な社会の探究Ⅱ」と段階的に探究的な学習を進めていく流れとなっている（図1）。つまり、本校のSGHにおいて、課題探究のスタートとなるとともに、その基礎を形成するための学校設定科目が1年生必修「グローバル地理」である。



図1 お茶の水女子大学附属高等学校 SGH 概念図

(出典：お茶の水女子大学附属高等学校 HP <http://www.fz.ocha.ac.jp/fk/menu/sgh/outline.html>)

3. 「グローバル地理」の概要

学校設定科目である「グローバル地理」は1年生全クラス120人全員を対象に2単位科目として、SGH指定2年目にあたる2015年度に開講した。目的は前述のように、学年とともに段階的に進んでいく探究的な学習の基礎を形成することである。

2017年度の年間授業計画を表1に示した。まずは、「課題探究とは何か」を理解し、「探究の技能」を学んだ上で、環境、資源・エネルギー、災害、食料、人口、ジェンダーなどのグローバルな社会課題を広く知り、それら諸課題の中から、次年次以降も自分が追究したいと思う課題を見つけ、2年生必修「持続可能な社会の探究Ⅰ」に接続する流れになっている。

探究に必要な技能については、一朝一夕に修得できるものではないが、1年生の早い時期に技能を身につけることを意識させ、その後、らせん階段状に繰り返し指導をしていくことで、2年次以降の本格的な探究活動の質的向上が期待できるものと考えている。正しい情報の取得方法、参考・引用文献の示し方などレポートや論文の執筆ルール等の指導にも力を入れており、担当者からだけでなく、お茶の水女子大学附属図書館担当者による図書館活用に関する講義や大学教員による社会調査に関する講義を実施している。また、探究の技能の一つである地理的技能を獲得する過程で、課題解決のツールの一つとして、地図が有用であることを過去の事例から学んだり、生徒自身が主題図を作り社会的な課題を可視化し、発表し合うことで社会課題を共有したりするなどの取り組みを行なっている(図2)。

グローバルな社会課題を学ぶ際にも、大学等の専門分野の研究者による特別講義を年数回実施し、専門的な学問への興味・関心を高め、当該分野への知識を深める機会を設けている。その上で、生徒それぞれが課題を設定し解決にむけた探究を行い、その成果を個人又はグループで地図や論文、記事等にまとめ、外部に向けて発信するという学習サイクルを繰り返すカリキュラムになっている。

生徒の積極性やチャレンジ精神を養うため、外部へ学習成果を発信する機会を多く設けているのも特徴である。自らの意見や課題意識等を新聞に投稿することや、環境地図教育研究会主催「私たちの身のまわりの地図作品展」、中央大学主催「高校生地球環境論文賞」⁽³⁾など外部コンテストへの応募を促すとともに、日本地理学会高校生の部ポスターセッション⁽⁴⁾への参加を呼びかけることで、将来研究分野でリーダーシップを発揮できるような人材の育成を意識している(図3)。

また、有志を対象に、筆者が顧問を務めるアフガン・ボランティア部⁽⁵⁾において防災を考える勉強会を定期的開催することで、「グローバル地理」の時間を補い、実際に社会への貢献を行ないたいと考える生徒たちの志を支援している。2015年度はお茶の水女子大学地理学コースと連携して気仙沼・南三陸町、2016年度は箱根、2017年度は鎌倉において減災・防災を考えるフィールドワークを実施し、その成果を校内だけでなく附属中学、日本地理学会高校生の部ポスターセッション等で伝えている。

表1 2017年度 グローバル地理年間授業計画

学期	月	単元	学習項目	学習内容とねらい	探究成果の発信
1学期	4月	課題探究とは何か	1 ガイダンス	<ul style="list-style-type: none"> ・「グローバル地理」の目的・意義を理解する。 ・日本地理学会世界認識調査、グローバル地理アンケートを実施。 	
			2 諏訪地域の課題を発見しよう	<ul style="list-style-type: none"> ・長野県諏訪地域を事例に、地域の特色や魅力、社会的課題を発見し、解決方法について考察する。 ・地域の特徴を理解する手段として地形図のルールと読図方法を身につける。 	
			3 諏訪フィールドワーク	<ul style="list-style-type: none"> ・お茶の水女子大学・長谷川准教授による特別講義「諏訪フィールドワークに向けて」 	
	5月	探究の技能	5月11日(木)～5月13日(土)	<ul style="list-style-type: none"> ・[1日目] クラス別フィールドワーク：トコロテラス(寒天)、山田養蜂場、諏訪大社 ・[2日目] ネイチャーガイド付き八島湿原観察 ・班別フィールドワーク：下諏訪町 御田町商店街での聞き取り調査 	
			1 調査・発信のルールを学ぼう	<ul style="list-style-type: none"> ・「課題探究とは何か」における探究活動をふりかえり、適切な情報収集や処理の方法を確認する。 ・効果的な発信の技法、引用・要約の方法や参考文献の示し方等の発信の際に守るべきルールを確認する。 	
	6月	探究の技能	2 地理的な見方・考え方を学ぼう	<ul style="list-style-type: none"> ・探究に必要な地図の図法、統計、資料の分析などの地理的技能を身につける。 ・GIS(地理情報システム)の概念を理解し、課題解決に役立つことに気づく。 ・地図が課題解決に役立つ事例等を取り上げ、地図の有用性について理解するとともに、地図を用いた新たな課題解決方法について考察する。 	発信④ 地図を課題解決に活用しよう(私たちの身のまわりの地図作品展)
1 自然環境と防災			<ul style="list-style-type: none"> ・地形・気候などの特徴と火山、地震・津波、異常気象等による災害について具体的事例の学習を通じて、災害の特徴や地域性、防災・減災への取り組み方や課題を理解し、防災について考察する。 	*発信④⑥の作品応募はいずれかを選択	
2学期	7月	グローバルな社会課題の探究	2 環境問題	<ul style="list-style-type: none"> ・酸性雨・オゾン層破壊・熱帯林減少・砂漠化・地球温暖化等のグローバルな環境危機に関する学習を通じて、相互の関連性に気づき、地球的視野で取り組むべき問題であることを理解する。同時に、課題には地域性があることに気づく。 	
			3 資源・エネルギー問題	<ul style="list-style-type: none"> ・世界的視野から見た資源・エネルギー問題、地域により異なる資源・エネルギー問題について理解する。資源・エネルギーの利用・消費と課題についての学習を通じ、資源の偏在性、有限性、消費における地域格差を理解するとともに、持続可能な開発と国際協力の在り方、日本の課題について考察する。 	発信⑥ 論文にチャレンジしよう(中央大学主催高校生地球環境論文賞)
	夏休み	グローバルな社会課題の探究	4 食料問題	<ul style="list-style-type: none"> ・世界的視野から見た食料問題、地域により異なる食料問題について理解する。フードマイレージの概念を理解し、自分たちができる問題解決のための取り組みについて考察する。 	発信⑦ ポスター発表にチャレンジ(日本地理学会秋季学術大会) <有志>
			5 人口問題とジェンダー	<ul style="list-style-type: none"> ・専門機関(ジョイセフ)による特別講義「途上国の人口問題とジェンダー」 ・世界的視野から見た人口問題、地域により異なる人口問題について理解する。人口増加地域と人口停滞地域における人口問題の違いを認識するとともに、問題解決のための取り組みについて考察する。人口問題の背景にジェンダーが存在することに気づき、ジェンダーセンシティブな解決に向けた取り組みについて考察する。 	発信⑧ 文化祭で学習成果を発信しよう
	9月	グローバルな社会課題の探究	6 居住・都市問題	<ul style="list-style-type: none"> ・人口集中と都市問題の発生、途上国の都市問題、先進国の都市問題の学習を通じ、人口集中によって生じる諸課題、途上国と先進国の違いを理解し、解決の方策や課題を考察する。 	
			7 生活・文化の多様性と摩擦	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバル化する世界と人間の活動を学び、文化・民族・宗教・ジェンダーなどの多様性、移民などによる社会の変容にもなる多様性について理解するとともに、多様性の拡大にももたらす社会的課題について考察する。 	
	冬休み	グローバルな社会課題の探究	7 生活・文化の多様性と摩擦	<ul style="list-style-type: none"> ・専門機関(ジョイセフ)による特別講義「途上国の人口問題とジェンダー」 	
8 食料問題			<ul style="list-style-type: none"> ・世界的視野から見た食料問題、地域により異なる食料問題について理解する。フードマイレージの概念を理解し、自分たちができる問題解決のための取り組みについて考察する。 	発信⑨ 新聞を読んでグローバルな社会課題を考察しよう(レポート作成)	
3学期	1・2月	世界の諸地域と課題	1 グローバルな視点からの地域理解	<ul style="list-style-type: none"> ・「グローバルな社会課題の探究」で学んだ課題を抱えている地域の自然環境、歴史的背景、宗教・民族、産業等の学習を通して、自然環境と生活・産業・文化の関わりについて考察する。 ・それらの地域的特性とグローバルな社会課題との関係について考察する。 ・「グローバルな社会課題の探究」で学んだ課題を抱えている地域の学習を通して、諸課題が単独で存在するのではなく、複雑に絡み合っていることに気づく。 ・世界情勢や日本との関係を踏まえ、3～4の地域について、下の事例のように学習する。 例) 中国の経済発展と影・世界経済に与える影響 東南アジア・林産資源をめぐる課題 インドの経済発展とジェンダー・児童労働をめぐる課題 ブレグジットに見るEU 揺れる移民大国アメリカ 成長するアフリカと貧困をめぐる課題 	発信⑩ 課題意識を発信しよう(新聞投稿)
			3月	1 探究Iに向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・自らの課題意識にもとづいて、「持続可能な社会の探究I」における探究テーマを設定する。 ・1年間の探究学習を振り返り、情報の収集や処理、発信の際のルールを確認する。
3月	1・2月	世界の諸地域と課題	1 グローバルな視点からの地域理解	<ul style="list-style-type: none"> ・お茶の水女子大学・杉野勇教授による特別講義「社会調査の基礎を身につけよう」 ・お茶の水女子大学附属図書館による特別講義「大学図書館を使いこなそう」 	
			1 探究Iに向けて	<ul style="list-style-type: none"> ・お茶の水女子大学・杉野勇教授による特別講義「社会調査の基礎を身につけよう」 ・お茶の水女子大学附属図書館による特別講義「大学図書館を使いこなそう」 	



図2 地図を用いた課題解決の試み

(2017年「私たちの身のまわりの地図作品展」国立環境研究所理事長賞等受賞作品)
 (左から:「用水路危険マップ」, 「非常時お茶大自然活用マップ」, 「気孔と交通量の関係マップ」)

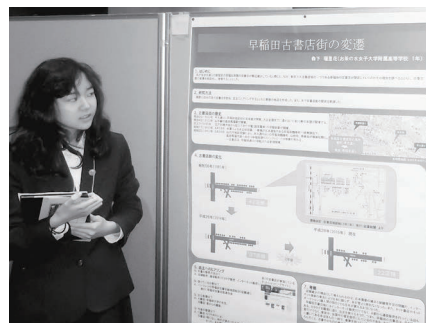
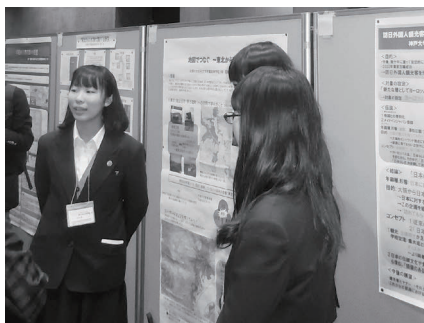
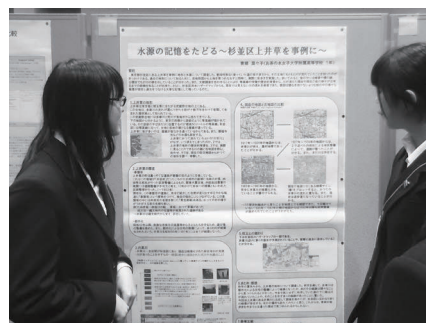
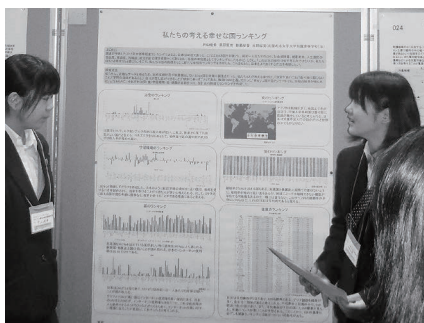


図3 日本地理学会高校生ポスターセッション発表の様子

左上:「私たちの考える幸せな国ランキング」, 右上:「水源の記憶をたどる～杉並区上井草を事例に～」
 左下:「震災から5年～復興の実像」, 右下:「早稲田古書店街の変遷」

4. フィールドワークの実践について

「グローバル地理」では、単元「課題探究とは何か」の中の活動の一つとして、フィールドワークを実施している（表1）。まずはグローバルな社会課題に先立って、生活圏の課題に目を向け、①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析・考察、④まとめ・発表、⑤新たな課題の設定という学習過程を体験させている。ここでは、フィールドワークの事前指導・事後指導を含めた一連の流れについて実践報告を行うとともに、その効果を考察していきたい。

4.1. 親睦目的の学年合宿から、「グローバル地理」のフィールドワークへ

本校ではかねてより、1年生の5月中旬に親睦を目的とした学年合宿を2泊3日で実施していた。1989年度から2010年度までの行き先は、おもに栃木県の日光であり、3日間の2日目にほぼ1日かけてハイキングなどを行い、自然に親しみつつ親睦を深める、という行程が取られていた。⁴⁾

2011年度は東日本大震災の影響により、日光での実施が困難になったことから、直前にもかかわらず宿が確保できた長野県の諏訪地域（以下諏訪）⁶⁾に行き先が変更されたことが、諏訪と本校が結びついた経緯である。しかし、その後、「グローバル地理」のフィールドワークとなっても地域を変更しなかったのは、諏訪が自然地理学的（気候・地形）にも人文地理的（産業・文化・歴史等）にも特徴があり、様々な視点から地域を見る学習の場として適していたためである。

4.2. 学習の流れとフィールドワーク評価表

学年合宿が「グローバル地理」のフィールドワークという位置づけになったことにより、大きく変わったことは、2点ある。第一に、従来は学年担任が行程を決めていたのに対し、現在は「グローバル地理」の担当者である筆者が主導し学年団と相談しながら、フィールドワークという視点から、宿舎で開催する講演・報告会を含めた全行程を決めるようになったこと、第二に、地域が抱える社会的な課題を発見し課題解決を考えるという探究的な学習の視点から、事前学習や事後学習までを「グローバル地理」の授業の一環として行うようになったことである。

学習の大まかな流れは、まず事前学習において、地域の情報や地理的特徴を収集した上で、社会的な課題を設定し、その背景や解決に向けて実際に行われている取り組みを知り、自分なりの課題解決に向けた考察をレポートにまとめ、生徒間で共有を行う。次に、現地調査を通して実際に自分の目で見たり、聞き取りを行うことで、新たな情報を収集し、地域をとらえ直すことで新たな課題を発見したり、より地域の現状を踏まえた課題解決を模索する。事後学習では、自分の聞き取った内容や考察をグループ内や報告会の場で共有し、議論・発表することで考えを深めつつ、フィールドワークにおける、自分の行動を振り返る、地域の方々へお礼状を出す、多少なりとも学習成果を地元へ還元することを一連の流れとしている。

フィールドワークをクラス単位や学年行事として実施をする場合、秋本ほか(2017)⁵⁾が指摘のように、「フィールドで適切な指示が難しい」ことが課題となるため、生徒に対しては、事前学習、現地調査、事後学習のそれぞれの段階における到達目標を示したフィールドワーク評価表(表2)を事前に提示している。これにより、フィールドにおいても、どのように行動すべきかがわかるようにしている。

表2 諏訪フィールドワーク評価表

5:大変そう思う 4:ややそう思う 3:どちらとも言えない 2:あまりそう思わない 1:全くそう思わない

学習活動		評価規準	評価点
事前学習	レポート	文献や統計を調査し、事前学習レポートを作成することで、地域に対する興味・関心を高めることができた。	
		レポート評価規準を読み、評価の規準を理解することができた。	
		グループでレポートを読み合い、班員のレポートに対し、相手が今後活かせるようなコメントをするように努めた。	
	発表	他者の発表を聞き、地域が抱える課題に対する興味・関心を高めることができた。	
		他者の発表を批判的に聞き、自分なりの疑問や見方を持つことができた。	
地図	行程を把握し、訪問地について地理的な位置を事前に頭に入れることができた。		
	地図帳や地形図により、諏訪地域の地形を事前にイメージすることに努めた。		
	地形図のルールや読図方法を身につけることができた。		
大学の先生の講義	大縮尺の地図を活用しながら、グループで協力して効率の良い回り方を考えたり、聞き取り内容について準備することができた。		
	メモを取りながら話を聞き、講義の記録(講義の感想、新たに獲得した視点等)を期限内提出することができた。		
現地調査	見学・観察	講義を受け、質疑応答の時間に積極的に質問することができた。	
		事前学習で知り得た情報をもとに、興味関心を持ちながら、観察することができた。	
	態度	事前学習では得られなかった情報を見学を通じて積極的に観察することができた。	
		自分のいる位置を地図で確認しながら、行動することができた。	
		主体的にフィールドワークに参加し、積極的に質疑応答などをするよう努めた。	
		グループで協力してフィールドワークを進めるために、自分の役割を見つけ、具体的に行動することができた。	
聞き取り	地域の方々貴重な時間を割いていただいているという自覚をもち、礼儀正しく振る舞うことができた。		
	質問内容や聞く順序などを工夫することができた。		
	話者の立場に立ってものを見、考えることができた。		
事後学習	報告会(2日目夜)	話者が集団の中に占める位置や役割などを考えることができた。	
		想定外のことや、困ったことが発生した時、臨機応変に対応することができた。	
		グループの中で自分の役割を見つけ、主体的に発表の準備をすることができた。	
	お礼状 新聞投稿 評価表記入	実施前に思い描いていた地域のイメージと実際の違いについて、具体例を示しながら仲間と議論することができた。	
		地域が抱える課題やその解決方法につき、仲間と議論した上で、自分なりの意見をもつことができた。	
	自分の考察や感想を、自分の言葉でプレゼンテーションしようとした。		
	地域の特徴や魅力を理解し、お世話になった方々にお礼状をだしたり、学習成果を還元するために具体的に行動することができた。		
	フィールドワークでの自分の行動を振り返り、反省しなければならない点をあげ、今後に向けた改善策を考えることができた。		

フィールドワークを通じて学んだこと、今後の探究学習に活かそうと思ったこと、自分の成長につながったこと、反省点などを自由に書いてください。

1年 組 番 氏名

A. 事前学習

(1) 地域課題の発見

諏訪を対象に、地域の地理的特徴や魅力、社会的な課題を発見し、自分なりに解決方法などを考察することを目的とする。フィールドワークの実施が5月中旬と入学から間もないため、3月に入学前課題として提示し、時間の余裕がある春休みを利用して、事前学習レポートを作成することで、4月・5月の学校生活に慣れない時期の負担を軽減している。課題図書⁽⁷⁾を読んだ上で、地域の特徴や抱える課題を調査し、自分の関心のあるテーマについてレポートにまとめ、入学式の日提出する流れとなっている。

(2) フィールドワークのガイダンス (1h)

グローバルな社会の諸課題の解決に寄与できる人材の育成を目指しつつも、まず初めは生活圏に目を向け、実際に自分で観察したり、話を聞いたりすることを通じて、地域の課題を正しくとらえること、その上で課題解決方法をあらためて考えることが、フィールドワークの目的であることを理解させるとともに、フィールドに入る上での注意点を伝えている。現地の方々が貴重な時間を割いて聞き取りに応じてくださいることを自覚させ、コミュニケーションする上でのマナー、調査後のお礼、成果の還元等の調査倫理を身につけさせることを意識している。また、班単位で行う2日目午後の聞き取り調査に関しては、どこで、だれから、どのようなことを聞き取るのか、どのような順路で回るのか等を生徒自身が考えるよう、事前の準備を促している。

(3) 地形図による地域理解 (2h)

地図帳を用いて、諏訪の地形の特色を大まかに把握した上で、紙の地形図（諏訪1/25000）を用い、地形図のルールと読図方法を身につけながら、地域の特徴を理解することを目的としている。行程を地形図上で確認し、土地利用・公共施設情報などにも留意しつつ、地域を総合的に理解する技能を養っている。また、旧版地形図（今昔マップ on the web を利用）と比較することで、歴史的背景や地域の産業の変化をとらえる力を養っている。

(4) 大学の先生による特別講義 (1h)

お茶の水女子大学文教育学部人文科学科地理学コース、長谷川直子准教授による特別講義を実施している。先生の研究の一端である約600年にわたる諏訪湖の御神渡り記録による過去の気候復元、湖の変遷といった内容をわかりやすくお話いただくことで、専門的な学問への興味関心を高めるとともに、知識を深める時間としている。

(5) 事前学習レポートの読み合い (1h)

はじめにレポート評価規準を説明し（資料）、今後レポートを作成する上での注意点を理解させる。その上で、事前学習レポートを生徒間（グループ）で読み合い、他者のレポートに対し今後活かせるようなコメントを入れる。最終的には、

他者のコメントを読んだ上で、自身のレポートを振り返り、自己評価を提出させている。

(6) 生徒レポート発表会 (1h)

事前学習レポートの出来の良いものを、筆者がクラス毎に5テーマ選び、パワーポイントを準備の上、クラスで発表させている。発表テーマは、地域が抱える課題を、自然・文化・産業の特徴や魅力、海外とのつながりと結びつけて考察したレポートを、テーマが偏らないよう選んでいる。

質の高いレポートの発表を入学間もない時期に全員で共有することで、全体のレベルを上げることがねらいである。出身中学により ICT 技能には差があるため、発表者にパワーポイントを作成する技能がない場合には、得意な生徒がサポートし、協力し合うことを促している。なお、発表を聞く際には、発表者の考察を鵜呑みにせず、批判的に聞き、自分なりの疑問を持ったり、考察したりしながら、メモを取ることを指導している。

クラスで発表されたテーマの一部を紹介する。

- ・御神渡りと地球温暖化
- ・御柱祭から森林を守る取り組みを考える
- ・諏訪を発展させた工業と今後の課題
- ・世界と味噌をつなげる
- ・「若者」と「よそ者」による町おこし

(7) その他

紙の地形図配布にあたっては、地図の折り方の一つとして、ミウラ折りを紹介し、宇宙工学や医学など地理とは一見関係ないように思われる学問も様々な形で繋がっていることを理解させるようにしている。

また、長野県の伝統食である蜂の子、イナゴなどの試食させることで、地域の特徴への理解や興味・関心を高めている。

B. 現地調査 (2泊3日)

(1) 行程

主な行程を表3に示した。学年単位のフィールドワークであるが、表中の()で示した人数ごとに案内者や説明がつき、比較的少人数で行動するようになっている。事前学習だけでなく、現地においても、繰り返し話を聞いたり質問をしたりする機会を設けることで、複層的に地域への理解を深めることができるよう工夫を行っている。

表 3 諏訪フィールドワーク行程表

1 日目	
昼	現地到着後、寒天御膳定食
午後	諏訪大社本宮・前宮 (10 人)、寒天工場 (40 人)、養蜂場 (20 人)
夜 (宿舎)	NPO 法人「匠の町しもすわ・あきないプロジェクト」ご担当者講話 (120 人)
2 日目	
午前	八島湿原 (20 人)
午後	下諏訪町・御田町商店街聞き取り調査 (班別行動：4 人)
夜 (宿舎)	聞き取り調査のまとめ・報告会 (120 人、4 人×2 班×2 展開)
3 日目	
朝	諏訪湖畔散策 (班別行動)
午前	岡谷市蚕糸博物館・宮坂製糸場 (40 人)
午後	味噌屋見学・味噌づくり (40 人)、御柱祭木落とし坂 (120 人)

(2) 下諏訪町・御田町商店街における聞き取り調査 (2 日目午後)

2 泊 3 日のフィールドワークの中で、生徒たちが最も主体的に動くことになるのが、2 日目午後の御田町商店街における聞き取り調査である。当商店街は明治末期から続く歴史ある商店街であり、かつては製糸業の工員などで賑ったが、2003 年には約 3 分の 1 の店舗が空き店舗となる。その後、住民を中心とした商店街活性化活動により、2011 年には空き店舗ゼロを達成した全国的にも注目を集める商店街である。

1 日目の夜、商店街活性化活動を担う「NPO 法人匠の町しもすわあきないプロジェクト」のご担当者からの講話を通して、どのようにして空き店舗ゼロを達成したかについて概要を伺い、当日は自分の目で商店街の様子を観察したり、聞き取りを行うことを通して、新たな視点を獲得した上で、再度地域の課題について考察することを促している。



図 4 御田町商店街における聞き取り調査の様子 (班別行動)

(3) 事後学習

限られた授業時間の中で、事後学習までをどのように行うか模索した結果、実施2年目の2016年度より、現地2日目の夜に宿舎にて振り返りの報告会を実施している。2日目午後の聞き取り調査について、地図を示しながら、どこで、誰から（話者の属性）、どのようなことを聞いたのか、その上で地域が抱える課題についてどのように考察したのかをプレゼンテーションし、一人ずつ一番心に残ったことや反省点を発表した上で、別の班と情報を共有し合い、議論を行い、考察を深める時間としている（図5）。

合宿後は、前述のフィールドワーク評価表を記入することで一連のフィールドワークを通じた探究的な学習を振り返るとともに、お世話になった方々へお礼状を書くこと、地元新聞に投稿することで学習成果を少しでも地元へ還元する気持ちをもつことを指導している（図6）。また、学習成果については、日本地理学会高校生ポスターセッションや本校文化祭での発表も促している。



図5 フィールドワーク報告会の様子（2日目夜：宿舎にて）

お茶の水女子大学附属高校の生徒からの投稿 ⑨

お茶の水女子大学附属高校の1年生から15日、学生生活の1週間を振り返り、生徒たちから寄せられた投稿を紹介します。

あの商店街は今

成瀬 悠華

私は学校の合宿で諏訪地方を訪れた。美しい諏訪湖がまた、懐かしい風景を思い出させてくれた。その中で私が一番記憶に残っているのは御田町商店街を訪れたことだ。

私はまだ中学生で、お茶の水女子大学附属高校の1年生から15日、学生生活の1週間を振り返り、生徒たちから寄せられた投稿を紹介します。

諏訪の繋がりど面白い

山田 万枝

私は諏訪を訪れて、諏訪の人々の繋がりと面白いと感じました。諏訪大社は歴史が長い御田町商店街を訪れた。お茶の水女子大学附属高校の1年生から15日、学生生活の1週間を振り返り、生徒たちから寄せられた投稿を紹介します。

共栄のまち、諏訪

鷲尾 美波

この春、学校のフィールドワークで私が訪れた御田町商店街は諏訪大社の歴史が長い御田町商店街を訪れた。お茶の水女子大学附属高校の1年生から15日、学生生活の1週間を振り返り、生徒たちから寄せられた投稿を紹介します。

諏訪とは

河野 千晴

山々と畑が広がる美しい諏訪地方。御田町商店街を訪れた。お茶の水女子大学附属高校の1年生から15日、学生生活の1週間を振り返り、生徒たちから寄せられた投稿を紹介します。

図6 地元の新聞への投稿（長野日報：2017年9月18日）

4.3 フィールドワークの効果

フィールドワークの意義については、これまでもいろいろと指摘されてきた。秋本（2003）⁶⁾は、第一に、「地域社会そのものを学ぶこと」であり、第二に、「地理学そして地理教育の本質的な研究・学習方法を学ぶことにある」とし、「現実世界を観察し、事実を自分の目や耳で収集したり確認したりする作業が、研究や学習の第一歩となる。」としている。また、井手・山下（2009）⁷⁾は、中学校の授業実践を通じて、「①地域を見る目の視点の変化、②具体的な地理的見方・考え方の育成、③さらなる学習意欲の喚起」、といった効果が見られたことを指摘する。

しかし、フィールドワークを取り入れた学習が、地理に限らず、探究的な学びにおいて、どのような効果があるのかという十分な議論がなされてきたとは言い難い。本稿では、諏訪フィールドワークを経験した本校生徒にどのような効果がみられたかについて、生徒が実施直後に提出したフィールドワーク評価表および1年間の「グローバル地理」の授業を終えた後に実施した授業評価アンケートをもとに、考察していく。

(1) フィールドワーク評価表より（フィールドワーク直後）

まずは、フィールドワークを終えた直後の生徒による評価表（表2）への自由記述より生徒の学びについて見ていきたい。「フィールドワークを通じて学んだこと、今後の探究活動に活かせそうだったこと、反省点」に関する主な回答を表4に示した。

表4 諏訪フィールドワークを通じて学んだこと（生徒自由記述）

- | |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>a. 事前学習はしっかりやったつもりですが、実際に足を運んでみないとわからないことがあると実感しました。今後は、本やネットで見ただけでわかったようにならず、なるべくその地を訪れて、地元の人の声を聞き、自分の目で確かめることを大切にしたいです。</p> <p>b. 現地を訪れてあらためて感じたのは、食文化にしても、商店街の活性化策にしても、それが形成されるのには、必ず背景があるのだということだ。これまでも何となく理由があるのだとは思っていたが、このように特定の地域について、詳しく事前調査し、実際に訪れることで、それがよくわかり、地域への興味や愛着がわいた。</p> <p>c. 想像以上に高齢化が進んでおり、店の継承が難しい店が多いことを実感した。利益や客数が全てではないという考え方は、御田町以外でも応用できるものではないかと思った。</p> <p>d. 地域の方々の温かさが身にしみた。一方で、商店街では、事前学習で聞いていた以上に高齢化がより深刻だということがわかった。店主さんもお客さんも高齢の方が多く、今は空き店舗ゼロでも、課題は続くことがわかった。Sumebaのような移住者を集めるやり方は有効だと思うが、都会の便利な所に住む人がそう簡単に移住はしないだろうとも思う。</p> |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

- e. 聞き取り調査をする前は、どちらかというとシャッター商店街を復活させたという結果にとらわれていたけれど、実際に話を聞いて、御田町ならではの、ものづくりの歴史を生かしたこと、人と人とのつながりを大切にしながら、イベントを開いたり新しいお店を迎えたりしていった過程や地域の背景に注目することができた。
- f. 新旧両方のお店にインタビューをしてみて、前日の講演にあった「すべてのお店が互いを受け入れ合い…」というニュアンスからはまた違い、お店によって今後の商店街のあり方について違う考えを持っていることに気づいた。課題は、だれの視点から見るかで解決策が違ってくるということがわかり、物事を一方からだけでなく、多方向から見ることの重要性を学ぶことができた。
- g. 昔からあるお店か、新しいお店か、若い人か、年配の人かなど、答えてくれた人によって、温度差というか意識の違いがあった。クリエイティブな仕事に就きたい人が事業を始めるのにはうってつけの下諏訪だが、商店街の栄え方はかつてのものとは変わってきていて、それに対して厳しい意見をもつ人もいることがわかった。空き店舗ゼロが課題解決のゴールではないと感じた。
- h. 空き店舗ゼロと聞いて、もっとにぎやかな商店街をイメージしていましたが、現実は大いぶ違いました。特に、通りが一本違うだけで、活性化活動について温度差があるのは予想外だった。また、プロジェクトに参加している人としていない人の間でも意識の差があり、街を活性化させるというのは、想像していたものほど単純ではなかった。
- i. 御田町は空き店舗がゼロでみなさんが幸せに働いているように考えていましたが、今でも課題があって、全員が満足いくようにするのは難しいということがわかりました。いろんな方向から物事を見ることが大切だと学びました。
- j. 事前学習で地図帳や諏訪の地形図を用いて周辺の地形をイメージした上で、現地を訪れることで、土地勘がついた。
- k. 私は班の中で地図を見る担当になったので、自分の今いる場所を確認する癖がついた。地図を読む力がついたと思う。
- l. 事前学習は大切だけど、フィールドワークはさらに重要だと思う。フィールドワークを通して、予想通りだったこと、予想外だったことがたくさんあった。予想外の答えが来た時には、正直困ってしまったけど、その場その場で臨機応変に対応することが重要だと思った。
- m. 聞き取り調査で、予想外の答えが返ってきて思わずすっとんきょうな声をあげてしまったが、それも事実なので、無視したり、ないことにしたりしてはいけないと思った。
- n. どのように質問をするかで、話を深く聞けるかどうか変わってくると感じた。Yes/Noで答えられる質問ではなく、「なぜ」「どのように」を聞くことが効果的だった。事前に何をどのような順番で聞くかを考えておくと、スムーズだった。

- o. インタビューをし、聞いたことを自分なりに考えることで、考える力が身についたと思う。1時間で報告会に向けたまとめが出来るだろうかと不安だったが、班員と協力し合い、相手の班に自分たちの意見を自分たちの言葉で説明できたので、まとめる力やプレゼンスキルも向上させられたと思う。
- p. 自分で得た情報をまとめ、考察していくことは、今後の探究学習でも生きる力だと思う。班の人たちが積極的だったので、私も刺激を受け、自分から意見をいったりすることで、自信がついた。
- q. 実際に地元の人に話を聞いてさらに関心が深まり、どうしたらもっと多くの人にこの素晴らしい御田町商店街を知ってもらえるかということを知り、発表をし合った班同士で沢山議論することができてとても有意義だった。今まで地方にはあまり目を向けて来なかったが、今回のフィールドワークを終えて、何か自分のできることをやりたいと思った。
- r. NPOの方からは「やりたい人がやる」という話がありましたが、商店街の活性化のために活動している人たちのように、私も興味を持ったことはどんどんやっていきたいと感じました。また、人と関わること、仲間と協力し、お互いを支え合うことがいかに大切であるかにあらためて気づきました。
- s. イベントなどが住民の方々の負担になっている面もあるようで、御田町商店街の新たな課題を見つけたように思いました。再び御田町を訪れ、課題解決に向けて考え、私も協力できればいいなと思いました。

これらの記述から、第一に、直接自分の目で見て、話を聞くことで地域への本質的な理解を深めていることがわかる。「実際に足を運んでみないとわからないことがある」というのは生徒にとって大きな気づきであり、類似の記述は大変多くみられた。また、「想像以上に高齢化が深刻」、「今は空き店舗ゼロでも課題は続く」といったように課題の要因となる社会の仕組みをより実感として理解し、その上で、「利益や客数がすべてではない」「イベントなどが住民の方々の負担になっている面もある」と地域社会の現状を踏まえた課題解決を考察できるようになっている記述も見られる (a、b、c、d、s)。

2つ目は、話者（聞き取りの相手）の立場や集団の中で占める位置による考えの違いや、個人による考え方の違いを受け止めた上で、課題解決を一方からだけではなく多面的に考えることができるようになっていることである (e、f、g、h、i)。評価表の中に、「話者の立場に立ってものを見、考えることができた」、「話者が集団の中に占める位置や役割などを考えることができた」という項目があったことも影響していると考えられるが、解決策は「だれの視点から見るかで解決策が異なる」ことに気づき、大きな課題を解決した地域でも全てがうまく行っている訳ではなく、「全員が満足するようにするのは難しい」ことや、「想像していたものほど単純ではなかった」とより深く、課題解決に向けた考察ができるようになっている。

3つ目は、地図の読み取り、フィールドワークのマナーや手法、報告会でのプレゼンテーション等を含む探究の技能の高まりに関する内容である (j、k、l、m、n、o)。「臨機応変に対応する」、「予想外の答えが返ってきて、ないことにしない」、「どのように質問するか、どのような順序で質問するか」が大切であることに気づいている。

4つ目は、探究意欲・課題解決に対する関心が高まる効果や、仲間との議論や協働作業といった学習方法が有意義であることへの気づきである (n、o、p、q)。最初は自信がなかった生徒も、フィールドワークを通じて自信を高めた様子が伺うことができ、「何か自分のできることをやりたい」、「私も協力できれば」と地域社会のために役立ちたいと意欲を示す生徒も出ている。「班同士で沢山議論できて有意義だった」とあるように、入学間もない段階で、協働的に学ぶことの価値へ気づき、互いに刺激しあえる仲間づくりを行う視点からも、フィールドワークの効果は大きいといえる。

(2) 1年間の「グローバル地理」を振り返った授業評価アンケートより

フィールドワークの実施から約10カ月後、1年間の「グローバル地理」を振り返った授業評価アンケートを、2017年3月、1年生119人を対象に実施した。「諏訪フィールドワークの経験は、今後の探究活動に活かせる」と回答した生徒は、全体の80.7%（「大変そう思う」33.6%、「そう思う」47.1%）であり、実施から10カ月を経過してから評価しても、効果を感じている生徒が多いことがわかる。

自由記述に関しては、直後に比べると具体的な課題に踏み込む内容ではなく、1年間の中の一部の活動として位置づける抽象的な表現が多くなっている。直後の評価表の記述にも類似の指摘があった、①現地に足を運び、地域の実態をよく理解した上で解決策を考えることの大切さに気づいたこと（ア、イ、ウ、エ、オ）、②課題や解決策を多面的にとらえるようになったこと（イ、オ、カ、キ）、③読図力の向上、正しい情報の選択、収集した情報を分析した上でまとめていく等の探究技能の育成に役立つこと（ク、ケ、コ、サ、シ、ス、セ、ソ、タ）、④主体的、協働的に学ぶことの価値への気づきや地域の人とのつながりから社会に貢献する意義を理解するようになってきていること（サ、ス、ソ、チ、ツ）の他にも、⑤フィールドワークを通じた事後学習から事後学習までの一連の活動により、探究的な学習の流れを理解し、2年次の「持続可能な社会の探究Ⅰ」をイメージしていること（テ）、⑥グローバルな課題の解決を考える前にローカルな課題にもっと目を向けるべきではないかという課題意識（ト）、③とやや重なるが⑦コミュニケーション能力の向上に関する効果について言及するもの（シ、ス、セ、ソ）も多くあった。

学年行事として実施するフィールドワークであることから、フィールドにおいては筆者から細い指示が出せず、生徒が評価表にて随時目的を確認することで到達目標を達成するよう行動することが求められるが、探究的な学習において大きな効果があるということは疑いのない事実であると考えられる。

表5 1年間の「グローバル地理」を振り返った授業評価アンケートより
(諏訪フィールドワークに関する自由記述)

- ア．事前にインターネットで調べて得た地域(特に御田街商店街)のイメージと実際に目にしたものは違う部分が多く、現地に足を運ぶことの大切さがわかった。インターネットを鵜呑みにしてはいけないなと感じた。
- イ．空き店舗ゼロを達成したという話から、もっと活気のある商店街をイメージしていたが、課題がなくなったわけでないことがわかった。実際に見たり話を聞いたりすることで、本当の課題を見つけることができるのだと感じた。
- ウ．地方の問題を知っているつもりでいたが、実際に話を聞くと、自分が知っていたこととは違うことが聞けて、知っているつもりではだめなんだと重く感じた。
- エ．聞き取り調査は初めての経験だった。都会に住んでいると地方都市の課題を実感ができないが、遠くから頭でっかちを考えるのではなく、まずは足を運んで現地の声を聞くことが大切だと思った。
- オ．1つの地域について、地理と歴史を結びつけて考えることができるようになった。それを無視した課題解決はないことがわかった。
- カ．地域のすべての人が同じ見方や意見をもっているわけではなく、聞き取り調査の難しさを感じた。聞いてきた情報をどのように取舍選択すべきか考えるようになった。
- キ．同じ質問をしても、答える人によって内容が正反対だったりして、それをどう捉えるべきか考えることで、一方からだけでない色々な見方ができるようになった。
- ク．諏訪でつけた地図力を夏休みの研究(地図を活用した課題解決)に生かすことができた。
- ケ．本物の地形図を初めて手にして、地図を見ながら地形をイメージしたりすることの楽しさを知った。
- コ．今まで主体的に何かを調査したことがなかったので、課題を設定したり、聞き取り調査をしてまとめたりするなど、調査やレポートなどの基本的な技術が身についたと思う。
- サ．インタビューした結果を報告会に向けて、まとめる作業が大変だったが、グループで話し合うのは楽しく、本音を言い合うことでメンバーと仲良くなれた。発表することでより、考えを深められたし、スキルもついた。
- シ．だんだん自分の聞きたいことを上手く聞けるようになっていった。この技能は、役立つと思う。
- ス．友達と諏訪を楽しみつつ、情報をシェアし、学びを深めるためのコミュニケーションをとることができた。
- セ．知らない人に話しかけるということが苦手だったが、フィールドワークを通して、インタビューを重ねるうちに、少しではあるが苦にならなくなった。

- ソ．コミュニケーション能力が少し上がった気がする。回数を重ねるうちに、どのように聞くと答えてもらいやすいのか、判断できるようになった。聞いたことのポイントをみんなでまとめる作業も楽しかった。
- タ．受け身な姿勢では何も得られないので、自然と能動的に活動していた。そのためか、とても記憶に残り、課題解決に向けた意欲が今も続いている。
- チ．実施に現地の人と会って対話をすると、その地域の課題をより身近に自分に近づけて感じることができた。自分から調べて発表したり、発表のためのメモを作ったり、前向きに学ぶことの楽しさを知った。
- ツ．地域の人の温かさに触れ、地方の現状を実際に自分の目で確かめることで、より課題解決への意欲が高まった。
- テ．事前学習→現地調査→後日まとめというフィールドワークの一連の流れを初めて経験した。課題発見から具体的な解決方法まで繰り返し考えることができた。探究Ⅰにつながりそう。
- ト．SGH はグローバルな課題に目を向けるが、自分たちの近くにもローカルな課題があることがわかり、諏訪を思い出すと、まずはこちらを解決するのが先ではないかと考えさせられる。

5. おわりに

本稿では、高等学校においてフィールドワークが十分実施されているとはいえない状況にあり、国際的に見ても日本人高校生がその力に弱いという危機意識の下、フィールドワークが地理教育、特に探究的な学習において、どのような効果があるのか論じてきた。学年単位で実施されるフィールドワークについては、その効果が疑問視されることもあるが、事前学習から事後学習までを一連の課題探究活動として捉え、到達目標を記した評価表を用いて、生徒がそれぞれの段階においてどのような行動を取るべきか確認できるような工夫をすることなどにより、フィールドで細かい指示ができないという弱点を補い、効果が高いものになると考える。

また、本校生徒が実施直後に提出したフィールドワーク評価表および1年間の「グローバル地理」の授業を終えた後の授業評価アンケートを見ると、2泊3日のフィールドワークの中でも、2日目午後に実施した下諏訪町・御田町商店街における聞き取り調査の経験から、地域をより本質的に捉え、新たな課題を発見し、解決に向けた考察を多面的に行なうことができるようになっていく効果がうかがえることから、探究的に学ぶためには、見学・観察だけに終わらないフィールドワークとすることも大きなポイントであるといえる。

事前学習により地域の課題がわかったつもりでも、実際に現地を見てみないとわからないことがある、というのはまず生徒にとって大きな気づきであり、一次情報を得ることの重要性を探究的な学習をスタートさせるこの時点で認識できたことの効果は

大きい。また、地域の特徴や実態をより正確に踏まえた上で課題を捉え、解決策を考えることが必要であることに気づくとともに、一つの大きな課題が解決した地域であっても、全てがうまく行っているわけではなく、地域内の温度差や時には摩擦があることも生徒たちははっきりと見定めている。また、収集した情報を分析した上でまとめていく等の探究の技能の向上の他、コミュニケーション能力の向上、協働的に学ぶことの価値や地域の人とのつながりから社会に貢献する意義を理解し、課題探究への意欲を高める効果があることもわかった。

聞き取り調査については、本校生徒が毎年同じような質問を繰り返すことで地域の迷惑になるのではないかという懸念は常にあり、マナー等の調査倫理については注意深く指導している。事後学習の一環として行なっているお礼状や学習成果の新聞投稿については、地域の方々からの良い感触を得ているものの、生徒を受け入れてくださったことが、地域にとってどのような意味があったのかを詳しく知ることで本フィールドワークの意義を明らかにしていくことは今後の課題である。また、本校では2年必修「持続可能な課題の探究Ⅱ」においてもフィールドワークを実施しているが、7講座の担当者とフィールドワーク評価表を含めノウハウや課題をどう共有し改善していくか、「グローバル地理」での学びをより効果的に2年次以降の探究的な学習に活かすにはどうすべきかなども課題である。

2018年3月の高等学校学習指導要領の全部を改正する告示により、必修「地理総合」が新設され、2022年度より年次進行で全国の高校生が必修で地理を学習していくことになった。「社会的事象の地理的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有意な形成者に必要な公民としての資質・能力」を育成することを目指しており、その目標は「地理探究」においても同様である。本稿「グローバル地理」によるフィールドワークの取り組みを、SGHの特殊な学校の実践報告としてではなく、「地理総合」や「地理探究」で求められている課題を追究したり解決したりする活動の実践として広く受け止めていただくことで、今後の高校地理におけるフィールドワーク導入のハードルを下げることに繋がれば、幸いである。

付記 毎年、本校生徒を温かく迎えてくださる下諏訪町・御田町商店街はじめ諏訪の皆様には心より感謝申し上げたい。また、フィールドワークの行程や評価表の作成にあたっては、お茶の水女子大学文教育学部人文科学科地理学コースの先生方にアドバイスいただいた。

註

- (1) フィールドワークという用語は、地理教育において、「現地調査」、「野外調査」、「巡検」などにしばしば置き換えられる。本稿では、それらの用語を「フィールドワーク」と統一して用いている。

- (2) 池俊介・福元雄二郎 (2013) は、神奈川県内のすべての高校（公立 187 校、私立 78 校、計 265 校）を対象に実施した 2012 年のアンケート調査により、フィールドワーク（野外調査・巡検・社会見学を含む）の実施率は 21% と報告している。また、篠原重則 (2000) は、香川県ではフィールドワーク最盛期の 1970 年頃には全公立高校 51 校のうち、19 校が実施していたが（実施率 37.3%）、1990 年時点では 2 校のみと報告している。
- (3) 中央大学主催「高校生地球環境論文賞」では、2015 年より 3 年連続で学校賞を受賞するなどの評価を得ている。
- (4) 日本地理学会高校生の部ポスターセッションでは、2015 年（秋季）が 4 件（9 名）、2016 年（春季・秋季）が 6 件（15 名）、2017 年（秋季）が 3 件（14 名）と継続的に採択され学会発表を行っている。
- (5) アフガンボランティア部は、2018 年 4 月現在の部員が 45 名と、本校で最も所属人数の多い部になっている。
- (6) 諏訪地域とは、岡谷市、下諏訪町、諏訪市、茅野市、原村、富士見町の 6 市町村を指す。本校フィールドワークコースに含まれるのは、岡谷市、下諏訪町、諏訪市、茅野市の 4 市町のみであるが、本稿では「諏訪」と表記する。
- (7) 課題図書としては、新田次郎『霧の子孫たち』（1980）、新潮社ほか、を提示している。

引用・参考文献

- 1) 池俊介・福元雄二郎 (2013) : 高校地理教育における野外調査の実施状況と課題, 日本地理学会発表要旨集, 2013s 巻
- 2) 篠原重則 (2000) : 地理教育における野外調査の実態とその再構築への提言, 新地理, 47 巻
- 3) 井田仁康 (2014) : 国際地理オリンピックと今後の課題, 日本地理学会発表要旨集, 2014s 巻
- 4) お茶の水女子大学附属高等学校 (2002) : 『創立 120 周年記念誌』
- 5) 秋本弘章・秋本洋子・伊藤悟・鶴川義弘 (2017) : 地理教育用 AR (拡張現実) システム (7) —高等学校におけるフィールドワーク教材の開発と実践—, 日本地理学会発表要旨集, 2017s 巻
- 6) 秋本弘章 (2003) : 野外観察と調査, 村山裕司編『21 世紀の地理 新しい地理教育』, 朝倉書店, pp.117-128
- 7) 井手秀成・山下宗利 (2009) : フィールドワークが生徒に及ぼす影響—中学校社会科単元「身近な地域を調べよう」を事例に一, 佐賀大学文化教育学部研究論文集, vol.14
- 8) 猪池雅憲 (2013) : 評価基準表を用いたフィールドワークの評価方法の改善—観光地域研究を例にして—, 太成学院大学紀要, 15 巻
- 9) 文部科学省 (2018) : 高等学校学習指導要領
- 10) 宮本常一・安溪遊池 (2008) : 『調査されるといふ迷惑』, みずのわ出版

グローバル地理 レポート評価規準

	関心・意欲・態度	思考・判断	資料活用 の技能・表現	知識・理解	書式・レイアウト
4	<ul style="list-style-type: none"> 社会の一員としての自覚をもちながら、意欲的にレポート作成に取り組んでいる。 諸課題について、解決に向けた方策等を自分なりに考えている。 	<ul style="list-style-type: none"> 適切な課題(テーマ)を設定している。 課題に沿って、論理的に考え、説得力のある主張とその根拠を提示できている。 	<ul style="list-style-type: none"> 客観性のある資料を入手し、正確かつ批判的に読み取っている。 3つ以上、先行研究の分析をしている。 引用など他者の主張と自分の主張を明確に区別して示すことができている。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題を考える上で、必要な知識を身につけ、問題の本質を的確にとらえることができている。 	<ul style="list-style-type: none"> 既定の書式設定をすべて守っている。 出典・図表の整理がすべて適切に行われている。
3	<ul style="list-style-type: none"> 意欲的にレポート作成に取り組んでいる。 課題について、解決に向けた方策等を自分なりに考えようと努めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 適切な課題(テーマ)を設定している。 課題に沿って、概ね論理的に考えているが、主張の根拠が不十分な部分がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 概ね客観性のある資料を入手し、正確に読み取っている。 2つ以上、先行研究の分析をしている。 引用箇所を示しているが、一部他者の主張と自分の主張の区別が明確でない部分がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題を考える上で、必要な知識を概ね身につけ、問題の枠組みを把握することができている。 	<ul style="list-style-type: none"> 概ね既定の書式設定を守っている。 出典・図表の整理は、一部適切でない部分がある。
2	<ul style="list-style-type: none"> 概ね意欲的にレポート作成に取り組んでいる。 課題について、解決に向けた方策等を多少は考えようと努めている。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題(テーマ)を設定しているが、適切でない。 論理的に考えていない部分があり、主張の根拠に不十分さがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 概ね客観性のある資料を入手しているが、読み取りが不正確な部分がある。 1つ以上、先行研究の分析をしている。 他者の主張と自分の主張の区別が不十分である。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題を考える上で、必要な知識が身につけていない部分があり、問題のとらえ方が不十分である。 	<ul style="list-style-type: none"> 既定の書式設定と異なる部分が目立つ。 出典・図表の整理は、適切でない部分がある。
1	<ul style="list-style-type: none"> レポート作成に意欲が乏しい。 諸課題について、解決に向けた方策等を考えようとしていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題(テーマ)を示せていない。 論理性に乏しく、主張に根拠がない。 	<ul style="list-style-type: none"> 客観性のある資料を入手していない。 文献による先行研究の分析をしていない。 他者の主張と自分の主張の区別ができていない。 	<ul style="list-style-type: none"> 課題を考える上で、必要な知識がなく、問題を理解していない。 	<ul style="list-style-type: none"> 既定の書式設定と異なる。 出典・図表が整理されていない。

レベル	※次回以降
自己評価コメント	

1年 組 番 氏名